



群馬県コンクール 金賞

こがね色のじゅうたん

太田市立毛里田小学校 4年 坂本 純聖

ぼくは、お米のことをあまり知らない。毎日三食かならずと言っても良いくらいお米を食べているのに。

世の中には、このお米を毎年作っている農家の人たちがたくさんいる。そんな農家の人たちはなぜ大変な思いをしてお米を作り続けているのかふしぎに思う。

ある年の秋、ぼくが新潟県で仕事をしているそふのところに遊びに行った時のことである。ぼくは、どんな場所に遊びに行ったのかも分からずに、お父さんの運転する車に乗っているだけだった。しかし、じっさい新潟県にとうちゃくしてから車から見た景色は今でもおぼえている。広大な景色の中にたくさんのこがね色に光るじゅうたんのようないねが広がっていて、そのいねをものすごいいきおいでかりとっていくコンバイン。まるで、大きなそうじきでゴミをすいとっているかのようにいねをしゅうかくしていた。その風景を見てぼくは思わず、

「すごいよ。お父さん。あのお米はどうなっちゃうの。」

と生まれて初めて見るお米のしゅうかく風景におどろきをかくせず、お父さんに聞いていた。お父さんは、ぼくにしゅうかくされたお米についてこう教えてくれた。

「コンバインでしゅうかくしたお米はもみすり・せいまいという作業をすると食べられる白いすきとおったお米になるよ。」

そして、ぼくはこの日しゅくはくするそふの家で食べたお米の味がとてもおいしく感じて今でもわすれられないとくべつな思い出になった。

この日のけいけんがぼくの中のぎもんの答えになっている気がした。それは、後でお父さんが教えてくれたが、米農家の人たちはお米が出来るまでの間、草取り・田んぼの水のかんりなどの日々の努力の積み重ねで作られているということだった。あの日の風景を見たぼくの中には美しい田んぼの風景以外にも農作業をがんばっている人たちのすがたもいっしょうつっていて、この人たちが毎日毎日かかさずにいねをかんりし、がんばっているからこそぼくは毎日お米を食べることが出来ている。

この日からぼくは、ある一つのことを自分の中で決めている。それは「お米をひとつぶも残さないで食べる」当たり前でかんたんのように見えるが、大人の人でも出来ていない人がいるようにぼくは感じる。ぼくに出来ることは、こんな小さなことかもしれないけれど、ぼくたちがお米をおいしく食べてよるこべるようにお米を作ってくれている人たちにもえがおでよるこんでもらえるようにこれからはがんばっていきたいと思う。